

# トヨタ財団レポート

## THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号  
 新宿三井ビル37F(〒160)  
 TEL. (03)344-1701~3

July 1979 No.6

第17回理事会開催

### 5周年記念事業の内容決定など

トヨタ財団では去る6月20日、第17回理事会を開催し、5周年記念事業の内容や国際部門助成対象について審議し、決定をいたしました。その他この理事会では、前年度決算の承認、今年度研究助成の応募状況の報告などが行われました。

▼5周年記念事業は、この10月に当財団が設立5周年を迎えるにあたり、これを機に行う特別事業で、次の3件を実施することとなりました。

- ①“身近な環境をみつめよう”研究コンクール
- ②アジアの子供劇場——東南アジア児童劇団の公演と会議
- ③明治・大正・昭和の建築遺産——全国巡回報告会

これらの概要は当レポート3頁をご参照ください。

▼国際部門助成は主として発展途上国を対象に助成を行うもので、常時申請を受付けています。そして各理事会ごとに、それまでの選考委員会で推薦のあった候補について審議し助成の決定をしております。今回は9件総額4516万円の助成を決定しました。対象チームを国別に見るとマレーシア4件、タイ3件、インドネシア1件、オーストラリア1件となります。

#### 〔研究助成、国際学術研究集会助成の公募締切〕

例年どおり4月初日から5月末日にかけて公募して参りました表記2件の助成につき、本年度の申請結果をとりまとめると下表のとおりとなります。研究助成は今年度も助成予定額の10倍を超える申請をいただきました。熱意ある研究者のご希望に十分お応えでき兼ねることを誠に心苦しく思います。同時に、このような助成活動を行う財団が日本にも数多く出現してくれることを痛切に願わざるを得ません。

今年の研究助成申請の特徴は、1件当りの平均申請額が昨年に比べ小さくなった点があげられます。件数的に見ると今回は特定課題が新たに加わったこともあって、当財団設立以来の多数となりましたが、申請金額的には年々減少してきております。ま

### ● 財団の活動状況について報告

—— 第4回評議員会 ——

去る6月20日、理事会に引き続き第4回評議員会が開催され、理事長および専務理事より昭和53年度の事業概況や決算報告、また昭和54年度の事業計画、収支予算の説明が行われ、各案件とも承認されました。また、評議員の方々よりこれからの財団活動のあり方に対して数々の貴重なご意見を頂きました。



—— トヨタ財団基金100億円に ——

トヨタ財団は昭和49年10月、トヨタ自動車工業株式会社およびトヨタ自動車販売株式会社の出捐による基金30億円の規模で設立されました。その後も引き続き自工・自販両社からの出捐により寄附金を受けてまいりましたが、去る4月2日トヨタ自販より4億円の寄附を受け、設立約4年6ヶ月にして、基金規模100億円となるに到りました。多額のご寄附を寄せられた両社に深く感謝すると共に、その設立趣意書にもあるように、世界的視野に立ち、しかも幅広く社会活動に寄与するため、今後もこの基金を有意義に用い、充実した活動を進めていかねばと思っております。

た、申請者の特徴として、大学や研究所の専門的な研究者以外に、さまざまな現場の活動に密着した方々が申請されている点があげられます。今回は初めての試みとしていくつかの雑誌・新聞に公募案内を出しましたが、一つにはこれが新しい申請者層を迎えることになったのではないかと思います。なお、今回始めて当研究助成に応募された方は本年度申請者の約6割となっております。

●昭和54年度研究助成、国際学術研究集会助成応募状況

項 目	申 請 状 況			助成予定額	
	件数	申 請 額	申請額/件		
研究助成内訳	交通安全、生活・自然環境領域	221件	11億3238万円	512万円/件	1億0000万円
	社会福祉領域	155	7 7603	501	7000
	教育・文化領域	198	6 8871	348	7000
	特 定 課 題	108	3 5091	325	3000
研 究 助 成 合 計	682件	29億4803万円	432万円/件	2億7000万円	
国際学術研究集会助成	16件	6143万円	384万円/件	2000万円	



## 設立5周年を迎えるにあたって

トヨタ財団専務理事 林 雄二郎

1974年の秋にトヨタ財団が誕生し、専務理事をお引き受けすることになったものの、私自身、財団活動とはいかなるものか全く知識も経験もなく、関連文献を幾つか読みあさってみても、どうも肌でピリッと感ずるところがない。そこで白紙の状態でも欧米の主要財団を歴訪し、トップの方々に会って親しく彼等の経験から出てきたアドバイスを聞くことにした。くわしいことは省くが、その結果、私は次のような指針をたてた。

1. 社会が老化しないようにするための種（シーズ）を積極的に自ら発見し、それを育てるためにさまざまな冒険の試行錯誤を行うこと。
2. それを自ら行い得るためには、それだけの眼力を財団自身が持たなければならないこと。
3. そのためにプログラム・オフィサーを持たなければならないこと。
4. しかもそれは間に合わせ的に調達すべきではなく、確たる目標のもとに養成しなければならないこと。
5. 自らの眼力に自信のないうちは勇み足になってはならないこと。

概ねこのような線に沿った方針を理事会にはかって承認を得た。

白紙の状態でも欧米の先輩財団を歴訪した時、私は極めて大きな刺激を与えられ、豁然と目の覚める思いはしたものの、正直のところ“恐るるに足らず”という実感をも強く持った。むろん、規模の点では比較にならず、フォード財団、ロックフェラー財団などは文字通りその大きさにおいては高嶺の花のようなものであるが、規模の大きさは正しい財団活動には必ずしも絶対の条件ではない。財団活動の“質”という点で、私たちは彼等に毫もひけをとらない活動はしてゆける。という実感を強く持ったのであった。

そのために、私は、まず有能なプログラム・オフィサーの養成からスタートすることにした。国内・国際にそれぞれ一人ずつそれを持ち、彼等に若干のプログラム・アシスタントを配する。プログラム・オフィサーは自ら社会を若返らせるためのシーズを発見し、それを育ててゆ

くための人脈を発掘することができなければならない。それを現実に展開してゆくために、今後の活動のための行動計画をたてる必要がある。そのために、財団設立5周年、10周年というのは頃合いの節目になるのではないかと思った。

まず5周年をひとつのメドにしよう。プログラム・オフィサーやプログラム・アシスタントたちをプログラム・スペシャリストとかわせていただくとすると、当財団のプログラム・スペシャリストたちは、昨年以來、いろいろと討議を重ねて幾つかのプロジェクトの計画をたてた。その中から、次頁に述べる3つのプロジェクトを取りあげることにし、それを理事会によって設けられた5周年記念事業委員会にかけて審議していただき、去る6月20日の理事会において承認を得た。

これらのプロジェクトについて、特に強調しておきたいことは、それらのプロジェクトが財団活動としてどのような特色を持っているのかということである。例えば、研究コンクール“身近な環境をみつめよう”にしても、“アジアの子供劇場”の場合にしても、こうしたプロジェクトをやること自体よりも、それをやることによって期待される反応というか、副作用というか、そちらの方を重視したいのである。そうでなければ財団活動としての意義は薄くなってしまふ。

5周年記念事業は、したがって、当財団にとって、とりわけ当財団のプログラム・スペシャリストたちにとって、自らの力をためすためのひとつの試金石ということになる。そしてその結果は他の助成活動を通じてさらに磨き直されてゆかなければならないことはいままでもない。

5周年の次の行動計画の節目は10周年ということになるが、その時までには当財団としては社会的評価を得られるようになっていなければならないと思っている。米欧の先輩財団にくらべて、たとえ規模の点では比較にならなくても、活動の質という面では一歩もひけをとらないだけの評価を得るまでになっていなければならないと決意している。よく言われるように、日本では財団というものに対する社会的評価は決して高くはない。いや端的にいえば甚だしく低いというべきであろう。しかし、それは評価する側ではなくて評価される側、つまり財団自身の側に責任があると思っている。



5周年記念事業の概要

第17回理事会で決定された当財団設立5周年記念事業の概要は下記の通りです。これらの詳しい内容等については、官製ハガキにて財団事務局5周年記念事業係に資料請求して下さい。

① “身近な環境をみつめよう” 研究コンクール

この研究コンクールは、専門の研究者と地元の関係者との共同による日常生活圏を対象とした研究活動を促進し、生活と密着した“身近な環境科学”の発展に寄与することを目的として行うものです。

このため、トヨタ財団では、本年10月15日より、生活環境の継続的な観測を伴う研究計画を公募し、内容・方法・体制等について独創性のあるものを選出して「研究奨励賞」を授与し、2年間にわたる研究活動推進のための研究奨励金を贈呈します。さらに、この2年間にわたる研究活動を通じて特に優れた成果をあげ、今後とも長期的な観測・研究が望まれるものには、「研究奨励特別賞」を授与し、その後の長期的な研究活動を支援します。

このコンクールの具体的な内容・手順については、さらに検討を加え、今秋には応募要項を整える予定ですが、公募の対象となる研究は、概略次表の通りです。

<研究対象>

- (1) 研究対象区域——原則として日本国内とし、都市域・農山漁村域、陸域・水域の別を問いません。区域の規模は、1～数小学校区程度を標準としますが、特に制限はありません。
- (2) 研究内容——下記事項の組合せにより、対象地域の実態と変化の動向を長期観測し、日常生活環境の改善・向上に寄与する研究とします。
  - 自然的現象…動・植物、気象、大気、水、土壌など。
  - 社会的現象…人口、土地利用、都市景観、騒音など。
  - 居住者の生活実態…住民の健康状態、子供の遊び方、主婦の社会参加、高齢者の余暇利用など。
- (3) 研究方法——特に観測方法については次の点が望まれます。
  - 児童・生徒、地域住民等が親しみをもって実施できるような素朴な方法。
  - 参加者の環境教育・環境学習の一環として意味をもつような科学的・実証的なデータの得られる方法。
- (4) 研究体制——大学・研究所等に所属する専門の研究者、小・中・高等学校の教師・児童・生徒、主婦などの地域住民、地域とつながりの深い職場に就業する者などの多様な組合せにより、地域に密着して長期にわたる観測・研究が可能な体制を期待します。

② アジアの子供劇場——東南アジア児童劇団の公演と会議

この企画は、国際児童年を記念して、東南アジア諸国の児童劇を日本の児童に紹介することを意図し、併せて児童劇の分野で、東南アジア諸国間および日本と東南アジア諸国間の交流と協力を促進することをねらいとして実施するものです。参加者はいずれも、児童のための人形劇や劇、おはなし等を奉仕的に行っている人々です。

公演は東南アジア諸国のうちのインドネシア、タイ、フィリピンのチームにより行われ、日本の(財)おはなしきゃらばんセンターが共演します。演目は、人形劇、劇、パントマイム、ワヤン・ゴレ等であり、日程・会場は下表のとおりです。

会議(ワークショップ)には、上記公演チームに加え、マレーシア、シンガポールや日本の各地からも児童劇の分野で活発な活動をしている人々が参加します。それぞれのチームが、活動の動機や展開の仕方、苦労や成功などの経験を語り合い、問題点への取り組み方や今後のお互いの協力などが暖かい雰囲気の中で話しあわれることを期待しております。

<日程・会場>

8月9日(木)	名古屋市雲竜ホール(インドネシア、フィリピン、日本の各チーム公演) 豊田市芸術・文化センター(日本、タイの各チームが公演)
8月10日(金)	豊田市文化芸術センター(インドネシア、タイ、フィリピン、日本の各チームが公演)
8月11日(土)	児童博会場(愛知県青少年公園)(上記4ヶ国チームが子供達と交歓)
8月13日(月)	埼玉県嵐山町国立婦人教育会館(上記4ヶ国チームが公演)
8月14日(火)	同上会館にて会議
8月15日(水)	同上会館にて会議

③ 明治・大正・昭和の建築遺産——全国巡回報告会

この巡回報告会は、現在編纂が進められつつある「明治・大正・昭和戦前現存建築リスト<sup>\*</sup>」の完成・出版を機に、日本各地でこれらの建築遺産に対する関心を深め、その保全・活用への機運を高めることを目的に実施するものです。

日本の主要都市6～8ヶ所にて、各地域に即して現存建築の実状、特色等を報告し、併せてこれらの保全・活用方策に関連した特別講演を行う予定です。またこれらの報告の後、東京において総括的な報告(P.8につづく)

\*この作成については一部、朝日学術奨励金、トヨタ財団研究助成金の援助が行われた。



活動報告

国際部門セミナー

●去る5月30日(水)午後、東京港区の国際文化会館にて、第4回国際部門セミナーが開催されました。このセミナーは、日本の稲作村落調査に参加した4人の東南アジアの研究者が、各自の専門的立場から、あるいは各自国の稲作村落と比較して、日本の稲作村落がどのような特徴・問題をもつかを卒直に報告することに主眼をおいたもので、そのプログラムは下記のとうりです。

講演 「東南アジアから見た日本の稲作村落」

龍谷大学(文化人類学) 口羽益生教授

フィリピン大学(社会経済史) Dr. Leslie E. Bauzon

インドネシア大学(文化人類学) Dr. Budhisantoso Subur

チュラロンコン大学(社会学) Dr. Prasert Yamklifung

マラヤ大学(農業経済学) Dr. Leo J. Fredericks

討論

(司会) アジア経済研究所 平島 成望

(ディスカッサント)

専修大学 玉城 哲

東京都立大学 速水佑二郎

お茶の水女子大学 原 ひろ子

アジア経済研究所 堀井 健三

明治学院大学 川本 彰

●まず最初にこの研究の代表者である口羽教授より、日本における3ヶ所(沖縄県八重山郡竹富町西表島祖納、滋賀県高島郡安曇川町藤江、新潟県白根市下道潟・上道潟・沖新保)の村落調査や翌年行われた東南アジア4ヶ国(フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシア)の稲作村落調査の主旨・概要等が報告されました。引続き東南アジアの4人の研究者より報告があり日本の農地改革の意義や教育制度の意義が指摘され、兼業化を可能としてきた経済的事情や社会的組織の特徴などについても突っこんだ意見が述べられました。特に、小規模な農家一戸一戸が機械を保有する「機械化された小規模農業」については驚きと共にむしろ疑問の方が強く指摘されました。日本人の目からすればあたりまえの事象が一つ一つ彼等にとって驚きであることに、改めて相互交流的な理解・認識の必要性を感じさせられた次第です。

●各報告の後には平島成望氏の司会により、5名のディスカッサントからのさまざまなご意見が寄せられました。土地と水との緊密な関係から成りたつ日本の農村の複雑さや、比較研究における視点・論点、調査方法に関する諸問題等、今後この研究を展開していく上での貴重な意見が述べられました。内容・方法・認識の深さ等において、1ヵ月で3ヶ所のフィールド調査は、いわば予備的調査にしかすぎないと思われませんが、東南アジアの研究者が直接、現場のフィールド調査に主体的に参加し、共に論議を重ねてきたことの意義は大変大きいものではないかと思えます。

●この国際部門セミナーに先立ち、京都において4日間にわたるシンポジウムがもたれ、日本と東南アジア4ヶ国における研究成果の総括的な報告と討論が行われました。そのプロシーディングは現在印刷中ですが、特にご要望の方は財団事務局までお申込み下さい。

(なおこの報告会の概要は「国際開発ジャーナル」7月号に特集記事として紹介されております)

報告するブディサントサ・スプール教授



左から順に口羽益生、L.E.バウゾン、ブディサントサ・スプール、プラサート・ヤムクリンフン、L.J.フレデリックスの各氏





助成刊行物紹介 ①

「都市化と幼児教育」

秋田大学幼児教育研究会・佐藤守編  
創文社刊 A5 640頁 5500円

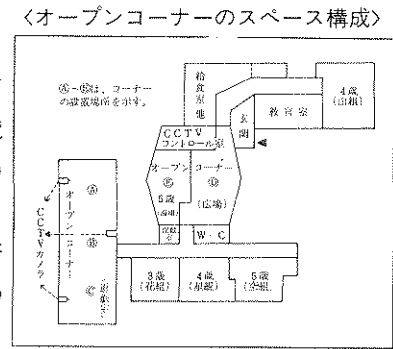
本書は昭和50、51年度研究助成「都市化の幼児教育に及ぼす影響の実証的研究」の成果をとりまとめて刊行したものである。佐藤守教授を代表とする秋田大学幼児教育研究会は、大学の幼児教育研究者と附属幼稚園教員とで組織する理論的研究と実践的研究との相互交流を目指した研究グループであり、本書にもそのようなグループの特徴を生かした研究成果が盛り込まれている。その概要は下記の目次構成からおおよそご理解いただきたい。

序章	変わりゆく地域社会と幼児教育
第1章	育児様式の社会史的分析
第2章	地域住民の幼児教育観
第3章	都市化社会における幼児の生活と遊び
第4章	都市化社会における幼児の発達
第5章	都市化社会における家族病理と育児
第6章	地域社会における保育施設の歴史と現状 ——秋田県の場合

第7章 混合保育の実践研究——幼児教育の新しい展開  
終章 新しい幼児教育の方法

第1章から6章までは都市社会(秋田市)、都鄙社会(平場農村の仙北町他2町村)、農村社会(山村の皆瀬村)について表記事項の比較調査を行い、都市化とともにどのような問題が発生するかを実証的に把握しようとしたものであり、第7章は秋田県下における保育所・幼稚園・託児所等の設置や運営の歴史を追跡し、施設面における現状および今後の課題を分析したものである。

第7章は、核家族化や兄弟(姉妹)の減少傾向に対しては従来の同一年令による固定学級以外の、異年令・異学級の混合集団による「オープンコーナーのスペース構成」保育が必要であろうとの考えに基づいて行われた実践的研究の詳細な記録とその分析・評価であり、現場と密着した本研究ならではの一つの特徴である。



助成刊行物紹介 ②

「ソーイ・トーン—タイ農民小説選—」

ニミット・プーミターウオン著 野中耕一編訳  
井村文化事業社刊(タイ叢書文学編1) A5 260頁 1400円

本書は昨年度から始められた「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成により出版された本のうちの一冊である。タイ農民文学としては日本で始めて紹介される本であり、表題作の原作は1975年度のタイ出版協会の最優秀作に選ばれた作品である。

この小説選には、『ソーイ・トーン』『ゆれ動く農村』『畑作農の娘』の3編が収められ、訳者の親切な解説がつけられている。

題名となった『ソーイ・トーン』とは、きれいな声で囀る雉鳩の名前である。この雉鳩を子供のように可愛がっている若い男やもめの農夫と、美しくやさしい寡婦との心のふれ合いを縦糸に、権力を背景に傍若無人に振舞う役人を横糸に展開する。役人にいじめぬかれる農民の悲哀、人生観、日常生活が語られている。

『ゆれ動く農村』には、近代化と貨幣経済の浸透によって古い農村が崩壊してゆく様子が描かれている。銃と金

の力で農村を牛耳るやくざと、それに立ち向う古き良き指導者の息子である青年によって繰り広げられる闘いの物語である。青年は新しい考え方や技術を導入して、村を貧困から救おうとするが、旱魃によって全ての努力が水泡に帰す。銃と金と自然の暴力によって疲弊し、ゆれ動いている農村の姿を写し出した小説である。

『畑作農の娘』は、開墾された原野に村落が出来あがってゆく過程を、若い娘と青年との交流を軸にして明るく描いており、自給自足の農民の生活や宗教観、村の人々の人間関係などがよくわかる作品である。

これら三編の小説は、それぞれの形で農村内部での力関係、中央の権力と農民の日常生活の係わり合いを描き、農村の支配構造があざやかに浮んでくる。本書は、学術研究書からは得られないタイの農村の立体像を我々のイメージの中に作り上げてくれる数少ない本といえよう。

訳者はタイ滞在が長く、この本の翻訳にあたっては、農村に出かけて行って直接農民と対話し、動植物や道具を観察し、食べ物を賞味したと聞く。また、それらの名称の適切な日本語訳を選び出すために、おびただしい数の参考書にあたられたそうである。



国際助成・インタビュー①

タイ、チュラロンコン大学 スラボン・スダラ博士  
環境保護の分野で東南アジアに積極的な協力を

昭和53年10月下旬から約1ヶ月間、タイの5人の環境専門家が日本各地を調査見学してまわった。「環境行政とその関連技術の研究」というこのプロジェクトでは、日本の環境行政と環境保護技術から示唆を得ることが目的であった。調査の対象となったのは、日本の政府官庁、県、市、民間センターなどの各段階における環境行政の組織構造と活動、環境制御、環境汚染問題解決の過程、政府および一般人の認識、法律およびその実施、経済的調整、などであった。

●日本を選んだ理由

——スラボン団長はじめメンバーの方々は大きな収穫を得て帰国されたとうかがっていますが、まず、日本に調査旅行を計画されたのはどういうわけですか。

〈スラボン〉日本から学ぼうと思ったからです。日本は環境汚染問題を解決しようと努力している世界の指導的な国の一つだからです。環境汚染問題は世界各所で起こっているため、タイの自分達だけで「いろは」の「い」から始めるよりも既に経験のある人々から学んだ方がいいと考えたわけです。他の国でなく日本を選んだのは、日本は他の先進国よりもタイに似ている。つまり同じような地域にあるからです。しかし日本の経験から学ぶということは、私達が日本のやり方をそのまま踏襲するというものではありません。そうではなくて、私達がタイにふさわしいと思うやり方を選び出せなければいけない、ということなのです。これが私達の調査旅行の主目的でした。その趣旨に沿って調査旅行のメンバーも選びました。メンバーは、各人の専門分野での経験があり、問題意識もはっきりしていることが必要であることは勿論なのですが、やはり何かを見てその中からふさわしいものを選択できる眼を持っていることが大切なわけです。

——タイにおける環境汚染の状況および環境保護の状況はどんな具合でしょうか。

〈スラボン〉環境汚染は深刻な問題になりつつあります。最初から環境汚染を防ぐような努力がなされていなかったため、環境計画というものはないわけです。タイの環

境汚染を前々から憂慮している私達専門家は、開発計画の当事者達に、「災害が起こってからでは間に合わない。他の国がどういった経験をしてきたかを学べば、災害が起こらないようにすることができるはずだ。」と言い続けてきました。こういうことにはなかなか耳を傾けてもらえないのですが、それでもやっと近頃、環境保護に対する関心が芽生えてきました。

●日本で最も感銘を受けたこと

——訪問された場所やお会いになった人々についての印象は、5人の方々それぞれ異なるでしょうが、スラボン団長にとって特に印象深かったのはどんなことですか。

〈スラボン〉私達が訪ねたのは、環境庁から始まりまして、東京都公害研究所、都の下水処理場、清掃工場、国立公害研究所、鹿島工業地帯、横浜市公害局、再資源化工場、し尿処理場、愛知県環境部、製紙会社、自動車会社、原子力発電所、三重県公害センター、岡山県環境部、石油会社、本四架橋、倉敷市、広島市基町再開発、通産省中国工業技術試験場、熊本大学、水俣市明水園、川崎市役所環境管理部、筑波学園都市、などです。メンバーも私もそれぞれの場所で非常に多くのことを学びました。短期間にこれほどの数の重要な所を訪ねることができたのは、私達の関心と希望をよく考慮してコーディネーションをして下さった東京工業大学の華山謙教授の献身的なご助力によります。

私にとって特に感銘が深かったのは、私達が訪ねたどの場所でも、関係者の方々が私達の欲しい情報を短時間にとっても要領よくまとめて伝えて下さった、という点です。前もって集まって下さって、何を伝えたら最も私達にとって役に立つかを討議なさって当日の用意をして下さったのです。私達5人とも専門が違うので質問もいろいろな角度からさせていただき、時には関係者がハラハラなさるような質問も若気のいたりでしてしまったのですが、皆さん本当に一生懸命答えて下さいました。日本の方々の、この、相手のために前もって討議をし準備をし、最善を尽くすという姿勢は私達が学びたい点です。また、水俣である献身的な医師にお会いしましたが、その方は寛大で、水俣に何が起り、どうなって行ったかを、私達はその例を繰返さないようにと、詳しく語って下さいました。村人のために働いているその医師の水俣病との取り組み方に大変感銘を受けました。四日市でも咳が起る有様をよ



くわかるように説明して下さった上、快よく何でも教えて下さいました。

—環境保全について日本が行ったやり方でタイにも適用してみたいと思われることはどんなことでしょうか。

〈スラポン〉タイは日本とは経済状態が違いますから、日本の例を適用すべきでないこともあります。しかし日本の例をそのままタイに持って来たいと私が一番思ったことは、一般の人々が環境問題の解決に参加し、環境保全の認識を一人一人がしっかり持つ、ということです。日本人の環境保全に関する認識は非常に高いと思います。だからこそ、環境汚染対策など多くのことができたのだと思います。また、技術的ノウハウで適用したいことはたくさんあります。たとえば、ゴミ収集システムや廃水処理システムなどです。それから、日本の人々がこんなことに関心があったとはと意外な思いをしたことがあります。といいますのは、日本は近代化が進んでいる半面、古い街の修復や文化遺産の保護をともしっかりやっている、ということに気がついたのです。こうしたことに一般の人々が参加しているのには感銘を受けました。タイには7~800年前ぐらいからの文化遺産がありますが、近代化が急速に進んでいるために、こうした保護すべき文化遺産が自国にあるということが忘れられがちなのです。

### ●複眼を得た5人

—5人の方々は帰国後どんな活動を展開なさいましたか。  
 〈スラポン〉対外的な活動としては、私達の日本での経験を他の人々に伝えようということで、まずチュラロンコン大学の人々を対象に割合長いセミナーを行いました。そのセミナーに、前通産大臣で今は私達の環境研究所の顧問をしている方がみえましたが、その方が発言をされて、このようなセミナーは大変重要なのもっともっと多くの人々に聞いてもらうべきだ、と言われました。私達はこの発言を大変誇りに思っています。また、大学外でもセミナーをしましたが、そこでももっと多くの一般の人々に聞いてもらうべきだという意見が出されました。私達はさらに、ラジオの番組、雑誌記事、新聞記事でも日本での経験を発表しました。バンコクを離れた所でも、北のチェンマイ大学、南のソクラー大学、師範学校などでセミナーや講演をして日本の経験の例をたくさん話しました。特にチェンマイではチェンマイ市の問題を取上げ、チェンマイ市は一体、二つの道のうちのどちらへ行こうとしているのかについて、日本の例を示しながら問いかけを行いました。

それからこれも重要なことですが、日本に行った5人が得た貴重な観点のことをお話しておきたいと思います。5人とも講義や講演、他の機関の人々との会議など

見学中の調査団メンバー



右端がラダワン・トリラサワディチャイ氏(経済学)、左隣りはプレスパン・カナタラナ博士(化学)、後姿がバンディット・チュラサイ氏(都市計画)。この他にピアムサク・メナスヴェタ博士(水産学)が参加した。



に、日本での経験を常に引合いに出しているのです。つまり、複眼を得て、常に比較ができるようになったということでしょうか。

●日本が公害輸出国の汚名を返上する時

—諸外国、特に東南アジアの他の国々と今後何らかの協力をお考えですか。

〈スラボン〉 環境問題は一国だけではなかなか解決できるものではありません。東南アジア諸国には多かれ少なかれタイと同様な環境問題が起こっていると思います。そこでシンポジウムやセミナーを組織して各国の専門家が経験や知識を交換し合うことがとても大切なのです。東南アジアどうしだけでなく、日本も参加して欲しいと思います。日本はここで指導的な役割ができるはずですから。日本は公害の輸出国として多くの人々から批難されています。真偽のほどはいろいろなからみがあって何とも確かなことは言えないようですが、こうした批難があることは日本にとって決して良いことではありません。日本はもっと東南アジア諸国と協力して、といっても政治的協力ではありませんが、情報を交換し合い、この地域の公害を少なくするためにこの地域の学者や環境専門家と協力すべきじゃないでしょうか。この地域には環境分野の専門家はまだ少ないので、もっと多くの専門家が育つ必要があります。またこういうこともあります。この地域では環境保護のための法律がいかに重要かの認識はまだまだです。そこで日本の経験や知識をこの面で分かち合っ下さる日本人専門家の協力が待たれるわけです。また、今回私達は日本で筑波研究学園都市を見学しましたが、あのような専門家集団とすばらしい施設のある所を、私達東南アジアの研究者も使えるような機会を何とか設けていただけないかという気がします。そこで専門家の指導も受けられ、互いの情報交換もできるというような機会です。このような地道な協力が実は日本に対する評価を結局は変えることになるのだと思います。

—とても示唆に富むお話をお聞かせいただきまして有難うございました。今後も一層ご活躍下さい。（文責岩本）

〔後日談：スラボン博士達のセミナーの影響もあって、5月にチェンマイ市には各層が参加した民間任意団体 Reservation Club が結成された。〕



(P. 3よりつづき) 会を開催すると共に、海外（先進国および途上国）からも関係者を招へいして、世界的な視野からこれらの保存・活用問題について討論を行うべくシンポジウムを計画しております。これらは昭和55年1月より12月の間に行う予定です。

〈編集後記〉

▶日本生命保険相互会社は、この7月に創業90年を迎えますが、これを機に日本生命財団の設立を決意されました。「人間生活の諸基盤を構成する経済、社会、文化、教育、福祉、科学技術の振興・向上あるいは健康問題、環境条件等の改善・充実について、時代や社会の要請および必要性を把握し、これら各分野における有意義な事業ならびに研究に対する助成を行わんとする」(設立趣意書より)ことが主なる活動や内容だそうです。新しい仲間が増え大変強い思いです。ご活躍をお祈りします。

▶当財団の研究助成は今年も10倍を越える申請をいただきました。今回はアンケートに皆様のご意見を記入してもらいましたが、熱のこもったさまざまなご意見をお寄せいただき非常に参考になりました。この種の研究助成に対する切実なニーズを身にしみて感じます。

▶財団基金も100億円に達し、この秋には財団設立5周年を迎えます。5周年を記念して3つの事業を計画しました。林専務理事には5周年を迎えるにあたっての抱負と記念事業のネライを書いていただきましたが、事務局としてはこの抱負にどこまで応え得るか、何だかこれから先の5年間は更に大変になりそうです。

▶今回から助成刊行物紹介の欄を設けました。拙ない紹介で原著の魅力を十分伝え得ない点はお許し下さい。これらに対するご意見・ご批評もどしどしお寄せいただきたいと思います。

▶財団事務局ではこのレポートと併行して昭和53年度の年次報告を編集しています。年々事業が増えると編集作業も増えてきますが新たな蓄積が増えていくことは楽しみでもあります。財団レポートや年次報告は希望者に無料で配布しております。当方のリストに未登録の方で送付ご希望の方は官製ハガキにてお申し込み下さい。

トヨタ財団レポート No. 6

発行日 1979年7月20日  
編集発行 財団法人 トヨタ財団  
(担当 山岡 義典)  
印刷 ㈱八重洲企画